

性病変を認めた。生検では偽肉腫増生を伴う中分化型扁平上皮癌と診断されたため、昭和62年11月12日、胸部食道全摘胸骨後食道胃吻合術を一期的に行った。手術所見は ImEi, Ao, N<sub>2</sub>(+), Mo, Plo, Stage III, R III, C III で、病巣は最大径 4 cm の広基性隆起とその周辺のびらん性病変から成り、組織学的に隆起部は肉腫状増殖を示し、基部近傍で高分化型扁平上皮癌に移行するいわゆる癌肉腫の形態をとった。No. 2 にリンパ節転移を認めた。術後は CDDP, BLM による化学療法を施行、現在再発の所見なく健在である。

今回は本症例を提示し、若干の文献的考察を加え報告する。

10) 食道癌肉腫の 1 例

岡 至明・植木 光衛 (刈羽郡総合病院)  
 関矢 忠愛・齊藤 六温 (外科)

食道癌肉腫は食道悪性腫瘍の中でも稀な疾患であるが、その 1 例を経験したので報告する。

症例は 69 才の男性で、嚥下困難、胸骨後部痛を主訴とし、上部消化管造影で食道腫瘤を認め、内視鏡下生検で扁平上皮癌の診断で胸部食道全摘を施行した。腫瘍は Im にあり、ao, n(-), Mo, Plo であった。

切除標本の病理組織学的所見では、腫瘍の大部分は平滑筋肉腫で占められ、腫瘍基部表面、腫瘍周辺の食道粘膜、腫瘍頂部表面の一部に高分化の扁平上皮癌を認めた。

また、癌腫と肉腫との境界は明瞭で、移行帯や dropping off は認められず、真の癌肉腫と考えた。

癌肉腫の概念は、ひとつの腫瘍の中に癌腫と肉腫が混在するもので Virchow によって提唱されたが、その肉腫様成分については種々の説があり、いわゆる癌肉腫、偽肉腫などの概念が提唱されており、いまだに結論が得られず、今後の検討に期待されるものである。

11) 当科における非開胸食道抜去術症例の検討

— その適応と問題点について —

田島 健三・和田 寛治 (長岡赤十字病院)  
 新田 幸寿・神谷岳太郎 (外科)  
 土屋 嘉昭・小野 一之

昭和54年4月より本年10月までに当科で切除された 110 例の食道癌症例のうち、非開胸食道抜去術を施行した症例は 44 例 (40%) であった。

本来胸部食道癌に対する根治手術としては開胸開腹によるリンパ節郭清を伴う食道亜全摘術と再建が行われるが、次に述べるような条件の場合に、食道抜去術が適応

となると考える。

- 1) 下部食道に癌腫があり、遠隔転移や或いはリンパ節転移が高度で根治手術が期待されにくい症例。
  - 2) 高齢者や、全身の疾患を合併している poor risk 例。
  - 3) 低肺機能や肺疾患・胸膜疾患のため開胸が困難と思われた症例。
  - 4) 他臓器癌術後で、食道癌が表在癌である場合。
- 以上自験例をもとに、その適応と問題点及び合併症等について検討した。

12) 十二指腸潰瘍穿孔による汎発性腹膜炎と噴門部進行胃癌の合併症例

星山 圭鉦・長谷川正樹 (柏崎中央病院)  
 山寺 陽一 (外科)  
 西巻 正 (新潟大学 第一外科)  
 川田 良得 (柏崎市高桑医院)

最近高齢者の十二指腸潰瘍穿孔による腹膜炎にはしばしば遭遇するが、進行胃癌との同時合併症例は極めて少ないと思われる。われわれは十二指腸潰瘍穿孔による汎発性腹膜炎の診断で緊急手術を施行し、胃潰瘍合併と思われた症例が、術後の病理検査にて噴門部進行胃癌と判明したため、2 期的に脾脾合併胃全摘術を施行した症例を経験したので報告する。症例は 74 歳の男性、既往歴では、高血圧、気管支喘息、慢性閉塞性肺疾患にて内科的治療中、昭和62年9月26日、コーヒー残渣様の嘔吐、腹部全体の激痛にて深夜入院す。

ただちに、十二指腸潰瘍穿孔による汎発性腹膜炎と診断し、手術施行・胃体上部へ噴門部に癭痕様の炎症性変化、硬結あり、胃潰瘍と判断し、できるだけ病変部を切除するようにして胃切除術施行。病理検査にて十二指腸潰瘍穿孔と未分化管状腺癌、OW(+)と診断され、10月29日、脾脾合併胃全摘術、Roux en Y 施行。ss, INF β, NO 3, 4sb のリンパ腺転移を認めた。術後経過は良好であった。

13) Blue Rubber Bleb Nevus Syndrome に早期胃癌を合併した 1 例

青野 高志・佐藤 巖 (南部郷総合病院)  
 鱈渕 勉・片柳 憲雄 (外科)  
 長谷川正樹  
 前田 裕伸・渋谷 隆 (同 内科)

Blue Rubber Bleb Nevus Syndrome (青色ゴムまじり様母斑症候群) は、1958年に William Bean により